

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 36 号

発行日
2024.9. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○大谷選手の偉業に想つー凄い若者がいるものである！

俗に言う「ミ〜ハー」的なことは思うが、昨日(20日)の、メジャーリーガー「大谷翔平」選手の偉業(50本塁打/50盗塁達成)本日52/52)については、何らかの感想を書いてはみたい！そう思うのである！朝(と言っても、かなり遅い！)起きて一階に降りていったら、普通は何も言わない我が奥さんが、「大谷選手が凄いことをした！」(というような言い振りだったと思うが?)と、私に告げたのである！一瞬、何のことかと思つたが、そう言えば、その日(日本時間の早朝)の試合は、もう終わっていたのだ！

「ホームランを3本も打つたのよ」ということだったが、その光景はすぐには見れないので、早々に朝食を済まして、二階の部屋に戻って、早速パソコンでネット記事を開いてみた！まとまったホームラン記事はなかったが、いくつかまとめてあったので、その連続性？は、かなりリアルに感じるこゝとが出来た！それにしても、6打数6安打、ホームラン3本、打点10、盗塁1とは!!とてもじゃないが、通常ではあり得ない！本当に、何という怪物なのだ！

シーズン当初の怪事件(二つ間違えれば、とんでもない事態が待ち受けていた?)、私生活等々、マスコミ界を賑わすスーパースターでもある彼であるが、その存在は、羨ましさを超えて、神々しくも見える(その相貌は、やんちゃな妖精のように愛らしく、とてもそのようには見えないが？笑)！ただ、彼のことを、日本(人)として誇らしく思うとは思わない(もちろん、他の人が、そういうことを言うことには、反論はないし、むしろ好ましく思う！本当である!)!!将棋の藤井7冠もそうだが、ただただ凄い若者がいるものだ、想うだけである！

○働き甲斐や生き甲斐は与えられるものではない！

さて、今回は、かなり「学校(教師)」についての言及を行うことになるが、もちろん、そこにあるのは、偶々そこで練り広げられる人と人との出会い(教える者と教えられる者、育てる者と育てられる者の邂逅)の場(関係)である学校(教師)の危機への想いである！ただし、そんなことは、私が、どんなに言葉を弄しても、当事者達には分かつていることである！しかも、外から、その弥縫策？を述べるしか、術がないのもある!!だから、その弥縫策？について、批判ばかりしても始まらないのである！要は、そこにある、当事者達の働き甲斐や生き甲斐がどうなっているのかである！そこがおかしくなっているのである！

しかるに、残念ながら、働き甲斐や生き甲斐は、当事者達が、自ら(内面から)得るものであり、他所から与えられるものではない！結局は、本人が、苦勞(苦惱)して得るしかない！しかもそれが、「先生」と呼ばれる者の宿命でもある!!ただし、周囲が、その足を引く張るだけであつたら、それこそ元も子もない！そこが今、問われているのである！言っておくが、そこから離れて別世界を作っていくだけでは、何も生まない!!

ただし、上記のように、そうした先生がいなくても(実はいたのであろうが!)、遅しく、そして颯爽と(苦勞を苦勞とも思わずに?)、自らの世界、やりがいを見出していく若者(卒業生)もいる！それはそれでよい！だが、みんながみんな、それも出来ない！とは言え、与えられるものではない！だから、「先生」が必要なのである！

○「せんせい」！「赤鬼」は、ついでに泣けばよい。もう随分前だが、『泣くな赤鬼』という映画(2019年6月公開。主演・堤真一。原作・重松清の『せんせい』所収の同名短編小説)を、テレビで見た！そのストーリーは、「高校の教師であり、野球部の監督を務める斎藤(通称「赤鬼先生」と、その元教え子であるゴルゴこと斎藤智之との再会を描く。赤鬼は、かつては生徒たちに厳しく接し、特に才能を持っていたゴルゴには特別な期待を寄せていた。」

しかし、ゴルゴは高校を中退し、その後の人生で挫折を経験。時が経ち、大人になったゴルゴは末期がんに侵され、余命宣告を受ける。そんな中、赤鬼と再会し、かつての過ちや人生の選択について語り合う。映画は、二人の過去の因縁と和解を描きながら、教師と生徒の関係、人生の儂さ、そして人間としての成長を深く掘り下げていく。

「クライマックスでは、ゴルゴが余命僅かであることを知った赤鬼が、彼のために最後の力を尽くす。ゴルゴは、かつての夢を叶えることができなかつた悔しさと、先生への感謝の気持ちを赤鬼に伝える。赤鬼も、ゴルゴの人生に対する後悔や自分の教育方法に対する反省を深く語る。最終的に、彼は家族や赤鬼先生に見守られながら息を引き取り、感動的な余韻を残して幕を閉じる。」

「この結末は、人生の選択と結果、他者との関係の重要性を観客に強く訴えかける。教師と生徒の絆や人生の選択という普遍的なテーマを扱っており、中でも特に教育の意味や、人が他者に与える影響について深く考察(赤鬼は、自分が過去に取つた厳しい態度が、ゴルゴの人生にどのような影響を与えたのかを深く反省し、後悔の念を抱く。先生の厳しい教育方針が、必ずしも正しい結果をもたらしたわけではなく、むしろ生徒の人生に大きな影を落とした可能性が...)。

「最終的には、二人が過去を乗り越えて再び心を通わせる姿が描かれ、和解と赦しのメッセージが...。とまあ、ほぼ記事の丸写しとなったが、私としては、「和解と赦しのメッセージ」ということが、何故か気になった(私にも心当たりがあるからである!!)！「先生」(赤鬼)は、いつ、どのよう泣けばよいのか?ただ、「赤鬼」は、今どこに? (井上)

○間違いないが、それで解決できるのか？

話題としては、かなり古く？なつたが、先月(8/27)、中央教育審議会が、「学校における働き方改革」、「教師の処遇改善」、「学校の指導・運営体制の充実」の在り方について答申した。ここでは、備忘も兼ねて、少し触れておきたい。注目したいのは、「教育委員会にDX化を！」であるが(何故なら、それが、「働き方改革の更なる加速化」につながるからである)、今一番必要とされるのは、改革の成果としての「実感」だからである(彼らには、仕事量の増加による、度

重なるスローガン・施策への不信が最高潮に達している?)！
具体的には、時間外勤務を月80時間以内に抑え、その進捗状況を「見える化」し、PDCAサイクルを通じて継続的に改善。適切な休憩を取れるよう、昼食時間の交代制、業務終了から翌日の業務開始までに一定の時間を確保する勤務間インターバル。その実現方法として、ICTの活用(環境整備)GIGAスクール構想の下での校務DXを加速。教育委員会に対しては、汎用クラウドツールの活用、ペーパーレス化、日常的な情報交換のオンライン化などによるデジタル化が提案されている！

なお、「学校の指導・運営体制の充実」では、教職員定数の改善と配置の再検討、若手教員への支援強化、学校内外の連携機能を強化するための「新たな職」の創設、支援スタッフの拡充など。さらに、社会人の学校への参入などにより、多様な専門性を有する教職員集団の形成(免許制度の検討)。「教師の処遇改善」では、給与体系や職種にも踏み込み(約7%の優遇措置があったものの、今では優遇分はほとんどなくなっている?)、教職調整額の率は少なくとも10%以上、加えて、学級担任には義務教育等教員特別手当の額を加算、管理職について手当を改善などとなっている。

だが、どれも間違いないが、果たしてそれで解決できるのか？もっと別な視点が必要だとも思うが、とにかく、今は、それでいくしかない!!ただし、そこに、「働き甲斐よ!生き甲斐よ!何処に彷徨う?」とならないことを願う!

○押しかけ(お節介?)が、学校(教師)を変える?!

度重なる改革・改善策の提示!しかし、それが出てくる度に、いわゆる現場は困惑、混乱し、今では、不信感、絶望感が蔓延し、心を閉ざし(壊し)、挙句の果てには、そこを去っていく者多し。一体、何故そうなっていくのか?働き甲斐とか、生き甲斐とか言っても、それが実感出来ないならば、そうなるのも止む無しとは言えるが、実は、朗報もないわけではない!

詳しくは、別途書いているが(「新教育協働への道」)、あの公民館の職員が、近場の小学校に、半ば「押しかけ」的に出向き(1日半)、それをきっかけにして、当該の教員達と一緒に授業づくり等を行ってきたが、最近では、他ならぬ教員達からの積極的なアプローチが増え、「迷惑感」や「負担感」等は、最早消えているという!とであった!実は今最も必要なのは、この光景である!これがなければ、どんなに立派な(そしてカネをかけた)施策であっても、現場は変わらない(動かない)!要は「実感」と「納得」が、そこにあるかどうかなのである!<短歌に託して>結局は、自ら感得するしかない!!<<

・ 凄いが若者が いるものである!

・ それしか言わない 否、それでよい!

・ 働き甲斐や生き甲斐 みんな分かってはいるのだ!

・ それがないと やってはいけないことを!

・ 働き方改革 くだいようだが 働き甲斐改革では?

・ そうでなければ 何になる?!

・ 「赤鬼」とついでにはいるが それほどでもなく?!

・ もともと「鬼」は 優しいのだ!!

・ 今これが必要なのだ! それさえ生まれれば

・ 弥縫策も生きる! 頑張れ当事者達!

<特別コーナー>堂本彰夫の古代史旅枕 ③<<

○改めて、古代九州の全体像を探る―その7―

要は、5世紀末までに(倭の倭の五王時代)、その版図が最大限に拡大し、その結果、東(分家 檀雲を国家/河内)と西(分家/筑後)に、それぞれの拠点が置かれたということであるが、少なくとも、8世紀初頭までは、本家としての筑紫倭国(九州王朝)は、歴然と存在していたということであり(形式上は、701年の「大宝律令」制定までは存続していた、密厳尊(朱雀大通りの遺跡あり)、その間の「白村江の戦い」(663年・百濟復讐戦)は、その九州王朝(分家)が主導したということである!

だが、その敗戦によって(しかも、679年の「筑紫大地震」も加わって)、倭国(九州王朝)は、壊滅的な状況を迎えていた(大和への集団移住/唐軍の駐留/傀儡政権の誕生?)。件の天智天皇(中大兄皇子)は、その倭国九州王朝(上皇)の類縁者ではあったが、正統(第一義的)な後継者ではなかった(だから、当初は「称制」であった?)!!おそろしく、その正統(第一義的)な後継者は、例の蘇我氏(上皇)であったと思われるが、その宗家である「蝦夷」(入鹿)を滅したので(乙巳の変、天智天皇側(後の持統・藤原政)に創り出そうとした「日本書紀」は、そのための書でもあったのである?)!!

まあ、この辺については、通説とはかなり違った推測ではあるが(その意味では惹きつけられるかもしれないが)、今後明らかにされていくものと思っ

ている!日本書紀が、最も隠したいところ、つまり、天武王統/蘇我・物部勢力(上皇)の存在と事績を、精緻に辿っていけば、自ずと分かってくる!ただし、そのことは、私個人では、到底無理であるので(時間的にも能力的にも)、その解明視点に同調される人が、一人でも多く出現されることを望む次第である!

ただし、私の努力/能力不足の故に、ひよっとしたら、もう既にそうした視点からの史実解明を行っている人(達)もいる?いつか出会えれば(ネット上?)、嬉しいものである! (つづく) (堂本)

<編集後記> 今日で、9月が終わる!まだまだ暑い日(別な暑い日も) 続いているが、刻々と、状況が変わっていることは間違いない!自らの「生」が、そうした状況の変化に随行させられることは、ある意味仕方ないが、やはり季節の「四季」だけはあって欲しいものである! (井上/堂本)